

contents

「第5回男女の生活と意識に関する調査」

結果報告	1
北丸雄二のニューヨークレポート⑦	7

「ありのままのわたしを生きる」ために⑦

今月のブックガイド	9
JASEインフォメーション	10

「第5回男女の生活と意識に関する調査」 結果報告

(社) 日本家族計画協会 家族計画研究センター所長 北村邦夫

「第5回男女の生活と意識に関する調査」は、2010年度厚生労働科学研究費補助金（成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業）「望まない妊娠防止対策に関する総合的研究」（主任研究者竹田省順天堂大学医学部産科婦人科学講座教授）の一環として、分担研究者である筆者が中心となって実施した。これで02年、04年、06年、08年、10年の5回にわたって行われたことになる。

本稿では、性教育に関連する項目を中心に、調査の成果を報告することとした。

❖ 調査の概要

「第5回男女の生活と意識に関する調査」を行うにあたっては、①調査の目的と必要性及び期待される成果、②調査及び学術調査の概要、③調査内容（調査目的と質問項目）の妥当性、④調査対象者の標本数及び属性について、⑤調査対象者の選定・依頼と協力について（選定基準、依頼方法、協力の詳細）、⑥調査対象者の権利の保護について（調査対象者が未成年者の

場合も含む）、⑦個人情報保護の方法、⑧調査結果の公表などについて詳細に明記した上で、(社)新情報センター倫理委員会（東京都渋谷区）に宛てて「倫理審査申請書」を提出し慎重な審議を経た後、実施された。

調査は層化二段無作為抽出法^(注1)という調査手法を用い、平成22年9月1日現在満16歳から49歳の国民男女3,000人を対象として、平成22年9月11日（土）～9月28日（火）に実施した。その結果、転居、長期不在、住居不明によって調査票を手渡すことができなかったものを除く2,693人のうちの有効回答数は、1,540人（男性671人、女性869人）、57.2%であった。同様な計算方法で算出した有効回答率は第1回52.4%、第2回52.7%、第3回51.9%、第4回54.1%であり過去最高であった。回答者の平均年齢は34.2歳（男性33.8歳、女性34.5歳）。

質問の内容を以下に列挙した。

- (1) 日常生活や考え方について
- (2) 性の意識や知識について
- (3) 対象者自身の性行動について

- (4) 初めてのセックス（性交渉）について
- (5) 現在の避妊の状況について
- (6) 低用量ピルについて
- (7) 子宮頸がん予防ワクチンについて
- (8) 人工妊娠中絶について

❖異性間での累積性交経験率に男女差なし

「あなたが、最初に異性とセックス（性交渉）したのは何歳の時ですか」の問いに対して、男女1,301人（男性565人、女性736人）から回答を得ている。性交経験者での平均初交年齢は19.0歳（男性18.9歳、女性19.1歳）であった。無回答を除いた性交経験率を過去の調査と比較すると、15歳時点での経験率は、現在16～19歳の女性は1.6%、男性は6.6%であり、他の年齢層に比べて低いことがわかる（表1、表2）。性交開始が低年齢化、加速化しているという印象は受けない。年齢階級別累積性交経験率には男女差がほとんどないことも特徴となっている（図1）。

表1 男性の以下の年齢での性交経験率

	15歳			18歳		
	2006年	2008年	2010年	2006年	2008年	2010年
16～19歳	10.7%	10.0%	6.6%	-	-	-
20～24歳	13.8%	21.2%	6.3%	51.7%	42.4%	41.3%
25～29歳	7.6%	8.8%	14.6%	46.8%	46.3%	52.4%
30～34歳	5.0%	10.5%	9.2%	38.6%	54.3%	51.0%
35～39歳	5.5%	10.7%	6.7%	37.3%	50.8%	44.5%
40～44歳	9.3%	3.7%	3.3%	44.3%	48.6%	48.9%
45～49歳	1.1%	3.7%	4.2%	34.8%	27.2%	43.2%

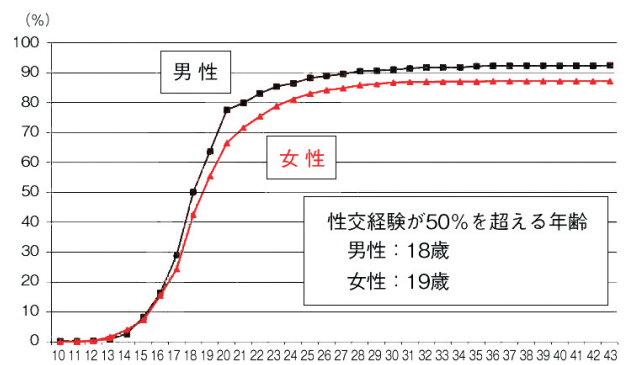
（北村邦夫「男女の生活と意識に関する調査」2006、2008、2010 性交経験無回答例は除く）

表2 女性の以下の年齢での性交経験率

	15歳			18歳		
	2006年	2008年	2010年	2006年	2008年	2010年
16～19歳	7.5%	4.2%	1.6%	-	-	-
20～24歳	11.5%	10.5%	14.6%	44.8%	38.4%	43.8%
25～29歳	6.5%	11.6%	12.7%	42.4%	52.6%	52.0%
30～34歳	6.0%	11.1%	4.5%	47.4%	48.4%	51.8%
35～39歳	7.3%	3.5%	4.8%	37.1%	38.6%	45.5%
40～44歳	4.3%	2.9%	7.6%	29.3%	39.4%	38.9%
45～49歳	1.6%	1.6%	3.1%	22.0%	18.7%	26.6%

（北村邦夫「男女の生活と意識に関する調査」2006、2008、2010 性交経験無回答例は除く）

図1 年齢別累積性交経験率（経験無回答者を除く）



（北村邦夫「第5回男女の生活と意識に関する調査」2010）

❖人工妊娠中絶を繰り返す女性の特徴とは

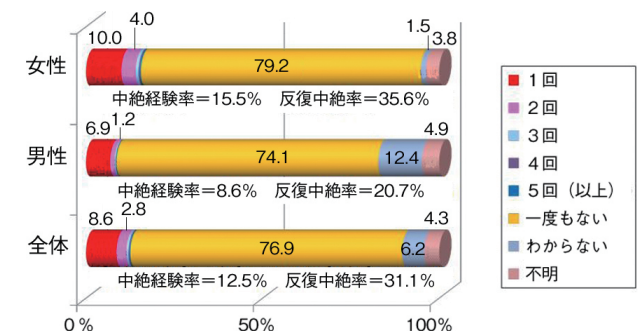
これまでに人工妊娠中絶の手術を受けたことが「ある」という女性は15.5%。そのうち35.6%が中絶を繰り返していた（図2）。1回目の手術を受けた年齢は23.9歳、2回目は24.9歳であった。

過去の調査結果を含めて反復中絶実施率をみると、前回に比べて10.2ポイントも高くなっていることがわかった。わが国の人工妊娠中絶実施率が年々減少傾向を示していることを考え合わせると、中絶に限られた女性によって行われているのではないかと推測される。としたら、中絶防止対策は反復中絶を防止することが効果的ではないだろうか。

100%確実な避妊法がこの世の中に存在しない以上、性交が行われる誰でも妊娠する可能性がある。その妊娠が仮に意図しない、あるいは予定外の場合、やむを得ぬ理由で中絶を選択せざるを得ない場合があることをリプロダクティブ・ライツ（性と生殖に関する権利）として捉えることが大切である。しかし、「繰り返すこと」についてはどうだろうか。

まずは、人工妊娠中絶手術を担当した医師やコメデ

図2 あなた（あるいは、あなたの相手）は人工妊娠中絶手術を受けたことがあるか



（北村邦夫「第5回男女の生活と意識に関する調査」2010）

表3 人工妊娠中絶を繰り返す女性の特徴

設 問	回 答	人工妊娠中絶の有無 (%)		
		なし	1回のみ	2回以上
1. 「中学生の頃の家庭」	楽しくなかった	23.4	34.9	40.4
2. 「両親の離婚経験」	はい	12.7	14.0	25.5
3. 「自傷行為（リストカットなど）の経験」	ある	4.8	14.9	29.8
4. 「避妊方法について主にどこで知ったか」	学校の授業	42.0	34.5	25.0
5. 「低用量経口避妊薬（ピル）の認知度」	よく知っている	10.7	23.0	31.3
6. 「初めての異性とのセックス」	重大だと感じていた	75.8	69.8	54.2
7. 「初めてセックスした相手との知り合い方」	町で声をかけられたりして知り合った	2.4	6.9	16.7
8. 「初めてのセックスの時に避妊したか」	避妊しなかった	18.7	23.0	37.5
9. 「人工妊娠中絶についての考え方」	認める	70.2	80.4	85.4
10. 「結婚したい気持ちがあるか」	いいえ	22.4	30.4	77.8
11. 「子どもの有無」	いる	52.5	87.2	89.6
12. 「学歴」	中学校卒業	7.7	8.2	18.8
13. 「喫煙習慣」	習慣的に吸っている	13.0	26.7	54.2
14. 「一週間の飲酒量」	一合以上	18.8	25.9	41.7
15. 「婚姻関係」	ある	52.9	72.4	81.3

イカルの怠慢さを問題にしたい。中絶が行われた日を月経の初日としてなぜ低用量経口避妊薬など确实避妊法を提供できなかったか、あるいは手術が行われるに合わせて子宮内避妊具や子宮内避妊システムの挿入を勧めることができなかったのか。

その一方で、今回の研究では反復中絶経験のある女性の特徴とともに（表3）、今後取り組むべき課題を明らかにすることができた。

1. 子どもの頃の家庭環境に問題はないか

「中学生の頃の家庭」について尋ねると、反復中絶経験あり群（以下「あり」群）では「楽しくなかった」割合が40.4%（「なし」群23.4%）と高率であり、「両親の離婚経験」では「あり」群25.5%（「なし」群12.7%）と高率であった。「自傷行為（リストカットなど）」についても「何回もある」「1度だけある」を加えた経験割合は「あり」群29.8%（「なし」群4.8%）となっている。

2. 喫煙・飲酒などの生活習慣に改善の余地はないか

「タバコを習慣的に吸っているか」には、「あり」群の54.2%、「なし」群13.0%が「習慣的に吸っている」と回答。「一週間の飲酒量」を尋ねると、「飲まない」は「なし」群が57.9%に対して「あり」群が47.9%と少数となっている。「3合以上」に限ってみると、「な

し」群が5.2%、「あり」群29.2%の結果であった。

3. 学習の機会が奪われているのではないか

今回の調査では「最終学歴」を聞いている。これによれば、「中学校卒」の割合が「あり」群では18.8%（「なし」群7.7%）、「高等学校卒業」までを加えると、「あり」群70.9%（「なし」群44.2%）であり、「あり」群では「なし」群に比べて公教育との関わりの機会が短いことが明らかにされた。これが、性教育や避妊教育の学習機会を奪う結果となっている。

例えば、「中学生がセックスすることについて」では、「責任のとれる年齢や立場ですべき」（「あり」群50.0%、「なし」群68.8%）、「学業の影響がありしないほうがよい」（「あり」群27.1%、「なし」群18.4%）であり、中学生のセックスに対して「あり」群が寛容な傾向であった。

また、「初めての異性とのセックスについて」も、「重大なことだと感じていた」という割合は、「あり」群の54.2%に対して「なし」群では75.8%で、セックスを意外と軽く考えている様子がうかがえるだけでなく、「初めてセックスした相手との知り合い方」では、「町で声をかけられて知り合った」が「あり」群16.7%、「なし」群2.4%と際立った違いを認めた。そのためか「初めてのセックスの時に避妊をしたか」では、「あり」群の39.6%（「なし」群70.1%）が「避妊した」と答えたに過ぎなかった。

「避妊方法について主にどこで知ったか」の問いでは、回答者全体の34.9%が「学校」と回答している一方、「あり」群での割合は25.0%（「なし」群42.0%）と極めて低率であり、その一方で、「友だち」の回答が「あり」群では35.4%、「なし」群18.9%と高かった。

このような傾向は、中絶経験がないということだけでなく、中絶経験が1回（「学校」34.5%、「友だち」17.2%）と比較しても統計的に有意な差を認めることとなった。

結局、中学生の頃までの性教育の不備が露呈される結果になったとは言えないだろうか。異性とのコミュニケーションの在り方、セックスに伴うリスクなど、本来であれば公教育の責任から義務教育年限までにしっかりと学ぶことが大切であるのに、そのチャンスが奪われたために反復中絶を余儀なくされているとしたら、看過できない由々しきことだと思われて仕方ない。

ちなみに、表4にあるように、例えば「コンドームの使い方」について国民は15歳までに67.2%が、「避妊法」については76.3%が「知るべき」と回答しており、この傾向は過去の調査と照らしても一貫している。しかし、その一方で、「コンドームの使い方」を中学3年生までに教えることは不適切であるとの烙印を押されかねないというのは、国民と教育界との間の乖離が大きすぎる。これでは反復中絶を減少させること、ひいては人工妊娠中絶を防止することは難しい。

❖セックス嫌いな若者たち

今回の調査で国内外のメディアの注目を集めたのが、「セックス嫌いな若者たち」である。若い世代でセックスに対する関心が薄れていることに驚きを隠せない。「現在、あなたはセックスすることに関心があるか」の問いに、「とても関心がある」11.6%（男性21.9%、女性3.7%）、「ある程度関心がある」51.5%（男性59.5%、女性45.3%）ではあるものの、「あまり関心がない」「まったく関心がない」「嫌悪している」の割合が、男女ともにではあるが、08年調査に比べて、特に若い世代で増加しているのだ（表5）。「男子の草食化」という言葉がメディアを賑わせているが、いったいその原因はどこにあるのだろうか。

草食男子という言葉が初めて登場したのは2006年

表4 性に関する以下の事柄について、15歳までに知るべきと思う割合（%）

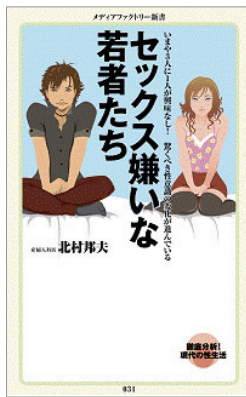
	2010年	2008年	2006年	2004年	2002年
男女の心と身体の違い	92.6	93.7	92.7	88.7	90.3
二次性徴、月経、射精などの仕組み	93.0	95.0	94.1	89.6	90.8
受精、妊娠、出産、誕生のしくみ	89.8	91.9	90.6	84.9	86.7
セックス（性交渉）	73.4	74.9	73.2	65.7	0.0
避妊法	76.3	77.2	76.5	70.1	75.0
人工妊娠中絶	65.1	68.0	66.9	61.4	66.8
エイズとその予防	77.1	77.0	78.1	71.8	75.1
エイズ以外の性感染症とその予防	74.2	74.7	73.5	68.8	72.3
コンドームの使い方	67.2	68.5	68.7	61.8	62.8
多様な性のあり方	59.4	57.5	55.7	50.8	50.6
性的被害の対処法	66.2	67.7	66.1	60.4	61.0
男女間の平等や助け合い	80.4	80.0	81.5	75.4	73.1
結婚	59.5	58.6	57.5	46.6	49.9
離婚	56.1	53.7	52.7	41.7	45.7
人と人とのコミュニケーション	86.4	85.9	84.7	80.2	76.0
性に関する倫理や道徳	76.8	78.1	76.2	72.1	70.9

（北村邦夫「男女の生活と意識に関する調査」2002、2004、2006、2008、2010）

表5 セックス（性交渉）をすることに、「関心がない+嫌悪している」割合の推移（%）

	2008年	2010年
男性 16～19歳	17.5	36.1
20～24歳	11.8	21.5
25～29歳	8.3	12.1
30～34歳	8.2	5.8
35～39歳	9.2	17.3
40～44歳	13.1	18.4
45～49歳	8.7	22.1
女性 16～19歳	46.9	58.5
20～24歳	25.0	35.0
25～29歳	25.0	30.6
30～34歳	30.4	45.8
35～39歳	35.7	50.0
40～44歳	47.5	55.6
45～49歳	45.4	58.6

（北村邦夫「男女の生活と意識に関する調査」2008、2010）



10月の「日経ビジネス」のオンライン版『U35男子マーケティング図鑑』。コラムニストの深澤真紀さんの造語だと記憶している。深澤さんは、草食男子を、『恋愛に「縁がない」わけではないのに「積極的」ではない、「肉」欲に淡々とした男子』と定義したが、事実はどうなのだろうか。

仕事の合間を縫って、20代の男女10人程の取材を重ねた。結論を急げば、性行動の二極化が進んでいることは事実だが、このうち、見た目「草食男子」については、セックスにはガツガツしていないが、マスターベーションには熱心であり、深澤さんの定義にある「肉欲に淡々」とは異なっていた。ここ数年の間に、若者たちの「性」が変化してきている。それにしても心配なのは、異性に限らず他人とのコミュニケーションを面倒だと感じている点だ。これではわが国の未来に暗雲が立ち込めているように思われて仕方ない。

個人的な話になるが、この調査結果を踏まえて『セックス嫌いな若者たち』（メディアファクトリー新書）を上梓した。拙著では、若い時代の自らの性を赤裸々に語っているが、身近な友人からは、「おまえには恥じらいというのがないのか」と厳しい言葉を向けられてしまった。売れるためならばと考えているわけでは決してない。北村邦夫の「キタ・セクスアリス」が、明日の日本を担う若者たちに、勇気と希望を与えることができるならばと願っているのだ。

❖ 婚姻関係にあるカップルでセックスストレス化が一段と進む

若い世代でセックスに対する関心が低下していることは前述したが、婚姻関係にある男女のセックスストレス化も一段と進行している。

日本性科学会は1994年にセックスストレスを「特別な事情がないにもかかわらず、カップルの合意した性交あるいはセクシュアル・コンタクトが1か月以上ないこと」と定義している。セクシュアル・コンタクトにはキス・ペッティング・裸での同衾どうきんなどが含まれることから、「この1か月間セックス（性交渉）が行われ

表6 婚姻関係にある人がセックスに対して積極的になれない理由

	n =	総数	男性	女性
		330	122	208
出産後何となく		20.9	18.9	22.1
面倒くさい		20.9	10.7	26.9
仕事で疲れている		16.1	19.7	13.9
セックスより楽しいことがある		5.8	4.9	6.3
家族（肉親）のように思えるから		4.2	3.3	4.8
相手がいない ^(注2)		3.3	8.2	0.5
相手の一方的なセックスに不満がある		1.8	2.5	1.4
妊娠することへの不安が強い		1.8	2.5	1.4
勃起障害に対する不安がある		1.8	3.3	1.0
家が狭い		1.2	2.5	0.5
セックスに際して痛みがある		0.9	0.0	1.4
その他		19.4	22.1	17.8
無回答		1.8	1.6	1.9

(北村邦夫「第5回男女の生活と意識に関する調査」2010)

ているか」と尋ねる本調査での質問は狭義にセックスレスをとらえていることになる。

婚姻関係がある男女でのセックスレス率は40.8%。同様な調査が第2回（04年）から実施されているが、04年調査では31.9%、06年が34.6%、08年が36.5%であり、わが国のセックスレス化が一段と進んでいることは明らかである。

婚姻関係にありながらセックスに対して積極的になれない理由を尋ねると、男性では「仕事で疲れている」がトップで19.7%（女性13.9%）、女性では「面倒くさい」が一番で26.9%（男性10.7%）、「出産後何となく」（男性18.9%、女性22.1%）、「セックスより楽しいことがある」（男性4.9%、女性6.3%）、「家族（肉親）のように思えるから」（男性3.3%、女性4.8%）などが続いている（表6）。

その一方で、深刻な事態も話題になっている。

❖ 虐待を受けたことがある女性は7.1%

今回の調査では初めて虐待経験について尋ねている。その結果、「18歳くらいの頃までに、両親や同居

表7 あなたは、18歳くらいの頃までに、両親や同居していた方から虐待を受けたことがあるか？（「ある」と回答した方のみ、複数回答）

	総数	男性	女性
総数	77	15	62
身体的な虐待（殴る、蹴る、熱湯をかける、たばこの火を押しつけるなど）	54.5	80.0	48.4
性的な虐待（性的な行為の強要、性器や性交を見せるなど）	11.7	-	14.5
養育の放棄（ネグレクト、食事を与えない、長時間放置するなど）	15.6	13.3	16.1
心理的な虐待（子どもの心を傷つけるようなことを繰り返し言うなど）	66.2	53.3	69.4
無回答	3.9	6.7	3.2

（北村邦夫「第5回男女の生活と意識に関する調査」2010）

していた方から虐待を受けたことがある」と回答した方が全体の5.0%（男性2.2%、女性7.1%）に上ることが明らかとなった。15歳から49歳の女子人口を踏まえると、単純計算で、女性では約200万人で虐待の経験があることになる。

「ある」と回答した方に、その内容を尋ねたところ（複数回答）、「心理的な虐待（子どもの心を傷つけるようなことを繰り返し言うなど）」が最も多く66.2%（男性53.3%、女性69.4%）、次いで「身体的な虐待（殴る、蹴る、熱湯をかける、たばこの火を押しつけるなど）」54.5%（男性80.0%、女性48.4%）、「養育の放棄（ネグレクト、食事を与えない、長時間放置するなど）」15.6%（男性13.3%、女性16.1%）、「性的な虐待（性的な行為の強要、性器や性交を見せるなど）」11.7%（男性0%、女性14.5%）となっている（表7）。

虐待の背景を探るために、他の質問とクロス集計したところ、虐待経験者のうち両親の離婚の経験がある人の割合は36.4%。虐待経験がない人で離婚経験がある人の割合10.6%より高かった。また、虐待経験者のうち、自分で自分の体に傷をつける自傷行為の経験者の割合は32.5%で、虐待経験がなく自傷行為を行ったことがある人の5.7%より5倍以上高い結果となった。

全国の児童相談所における児童虐待に関する相談件数は、児童虐待防止法施行前の1999年度に比べて、2010年度においては4.7倍に増加していると報告されているが、このように、一般集団を対象として虐待経験率を明らかにしたことは異例のことである。

謝 辞

本稿を終えるにあたり、本調査が厚生労働科学研究費補助金（成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業）の一環として行われたことを繰り返しご報告したい。主任研究者である竹田省順天堂大学医学部産科婦人科学講座教授からは調査研究費にご配慮を賜った。調査票作成に際しては、分担研究者である安達知子さん（総合母子保健センター愛育病院）、中村好一さん（自治医科大学医学部）に加えて、阿江竜介さん、古城隆雄さん、坪井聡さん（以上自治医科大学医学部）、菅陸雄さん（リプロヘルス情報センター）、吉田穂波さん（ハーバード大学）などから貴重な意見を頂戴することができた。層化二段無作為抽出法については既にご紹介した通りであるが、対象者の抽出にあたっては150市区町村において住民基本台帳の写しの閲覧が必要であった。厚生労働省雇用均等・児童家庭局母子保健課からは該当市区町村長に対して「住民基本台帳の写しの閲覧願ひ」をご提出いただいた。突然の調査依頼が向けられた関係市区町村の担当者の協力も不可欠であった。専門的な立場から終始ご助言を賜った（社）新情報センターの安藤昌代さん、煩雑な作業に協力いただいた当クリニック杉村由香理事務長、なによりも調査にご回答いただいた方々に深甚なる感謝の意を表したい。

このように大勢の方々のご協力をいただいた調査結果報告書が、これを手にされる皆様の研究、施策の立案に有効に活用されることを切に願っている。

（注1）層化二段無作為抽出法とは、まず、①全国の市区町村を都道府県を単位として11地区に分類し、さらに、②各地区においては、都市規模によって大都市、人口10万人以上の都市、人口10万人未満の都市、町村という4層に層化した。その上で、区・都市規模別各層における推計母集団数の大きさにより、それぞれ3,000の標本数を比例配分し、各調査地点の標本数が13～23になるように調査地点数を決めた。次に、抽出の1段階目として、各層内で国勢調査区より割り当てられた地点数を無作為に抽出し、2段階目として各地点を管轄する自治体の役場で住民基本台帳から対象者個人を抽出した。

（注2）「相手がない」の内容については、正確な読み解きができないが、「結婚しているが別居中」、「病気で入院中」などの状況が想定される。

※本報告書は、社団法人日本家族計画協会ホームページから <http://jfpa.my-store.jp/shopdetail/001001000001/order/> 購入することができます。

ジェイミーのこと

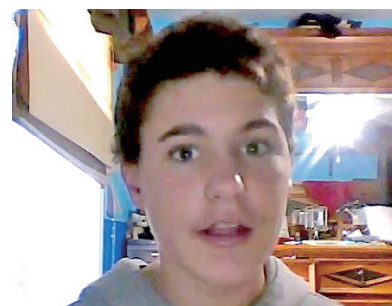
前回、YouTube を活用した「It Gets Better」というプロジェクトをここで紹介しました。その後、ロサンゼルス・ドジャースもこの取り組みに参加、マッティングリー監督やマット・ガリアー投手、ジェイムズ・ローニー1 塁手らを登場させて、いじめに遭っている若い LGBT の子たちに「十代が大変なのは知っている」「性的指向に関係なく、だれであっても敬意を持って接されるべきだ」「自分に自信を持って」「未来を見詰めて」とメッセージを送っていて、なんと日本の黒田博樹投手も登場して「必ずよくなるから！」と日本語で呼びかけているのです。

大リーグというのも男の世界。軍隊同様、選手個人としてはゲイを毛嫌いな人もたくさんいますが、少なくともここ十数年で組織としてはとてもゲイフレンドリーになってきました。観客動員数をあげようと「ゲイ・デイ」を設けて LGBT の野球ファンを呼び込んだり、選手教育も行われていて LGBT に対する侮蔑語を使ったりした選手には高額の罰金が科せられ、公式な謝罪がない限り試合にも出さないという措置がとられています。厳しいでしょ？ 「It Gets Better」ビデオにもサンフランシスコ・ジャイアンツを筆頭にシカゴ・カブスなど10 球団が参加しています。いずれ全球団に及ぶでしょうが、ただまだ、「ほくもゲイだ。きみも頑張れ」とカムアウトしながら呼びかけている選手は、残念ながら出ていません。

一方で、大企業や官庁などで働く LGBT たちがその組織の取り組みとしてこのビデオに参加し、「ほら、今はこんなに幸せになった」「だからきみも大丈夫」と涙ぐみながら訴える姿もあつたりします。

そんなビデオの1つに、今年5月4日に投稿されたニューヨーク州バッファローに住む14歳のジェイミー・ロドマイヤーのものもありました(=写真)。彼は自分に起きていることをまずこう紹介しています。

「ぼくには男の友だちがいなくて、友だちはだいたい女の子で、するとみんなからオカマとかひどい言葉を掛けられてイヤな気



持ちになるし、そういうのから逃げることもできないし、それにフェイスブックでは匿名の投稿サイトにいつもぼく宛に憎しみでいっぱい言葉やゲイは地獄に墮ちるとか書き込まれてる」

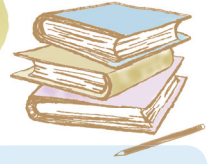
でも、続いて他の見知らぬ LGBT の仲間たちに向けてこう呼びかけているのです。

「でもぼくはきみに約束する。It Gets Better、きっとよくなる。ぼくはすごく大勢の人からサポートをもらっていて、なかには変に聞こえるかもしれないけど知らない人からも応援の言葉をもらったりして、そんなことで人は死んじゃいけないって思ってくれてる人たちが、ほんとうにみんなすごく心配してくれてるんだ」「ほんとうに、これからきっとよくなる。ぼくがカミングアウトした後でいるんな友だちが応援してくれて、すごく安心できたし、きみのために家族や友だちが必ず助けてくれるし、ゲイコミュニティの人たちもすごく優しくしてくれる。レディ・ガガもその1人で、彼女はぼくが、“I was born this way”(自分はこういうふう生まれついた)ってことを教えてくれた。だからこれがぼくからきみへ伝えたい彼女のメッセージでもある。人はみんな、いまあるように、そういうふう生まれしてきたんだ。だから顔を上げてずっと先を見つめて、ぼくもそうだけど、いまやるべきことは自分を愛して、やり直すことなんだ」

これを投稿した4か月半後、ジェイミーは自殺しました。レディ・ガガはそれを知り、コンサートで彼のために歌を捧げました。全米がいま再び、十代の LGBT へのいじめ撲滅に立ち上がろうとしています。

きたまるゆうじ ニューヨーク在住(18年)ジャーナリスト/作家/
元・中日新聞(東京新聞)ニューヨーク支局長。

「ありのままのわたしを生きる」ために



第7回

またまた第4のグループへ

土肥いつき

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のMtFトランスジェンダー。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

2学期のはじめ、わたしの勤務校では文化祭があります。昨年度より、わたしは「生徒会担当」として文化祭にかかわるようになりました。担当になったとき、最初に生徒会執行部の生徒たちに話したことは「やりたいと思うことをやればいい」でした。そして、「もしもまずいことがあったら、担当教員のわたしたちが謝るから大丈夫」とも言いました。仲間の教員は「オレ、謝るん得意やし(笑)」とフォローをしてくれました。このひとことは、どうやら生徒たちを元気づけたようです。はじめはおずおずと、やがて少しずつ好きなことをするようになり、今や生徒会室は生徒会執行部の連中のたまり場です。おかげで、今年の文化祭もみんな元気に走りまわっていました。

閑話休題。

わたしが入学した高校は、中高一貫のキリスト教系の学校でした。ですから、わたしのように高校から入学した生徒は完全な「アウェイ」の人間でした。友だちをどうやってつくるかを考えた末、クラブに入ることになりました。

母親の影響もあって音楽が好きなわたしが選んだのは「Hコーラス」というコーラス部でした。ちなみにこのクラブは系列の中学校にもあり、どうやら他の生徒たちからは「Hコーラスは変わり者の集団」と見られていたようです。入学後しばらくして「どこのクラブに入ったん？」と聞かれ「Hコーラス」と答えると「ああ、Hコーラスね…」と返されたのを覚えています。どうやら高校でも結局は「第4のグループ」に入ってしまったようです。

Hコーラスは混声四部編成で、わたしはテナーパートに振り分けられました。合唱の練習は、パート練習からはじまります。テナーパートとアルトパートは「内声部」と言われ、和音の真ん中の音を担当します。ですから、パートだけで歌っていると、曲によっては、まさに「和音の隙間を埋める音」が延々と続くことがあります。ほとんどメロディーらしいものがないままのパート練習は、音をとるのも難しいし、とても退屈

なものです。やがて練習が進んでアンサンブルになると、そんな気持ちが一変します。「なんのために歌っているのかなあ」と思っていた同じ音が、美しい和音の響きのひとつになったとき、身体が震えるような感動を覚えました。そして、「自分の出す音には意味があったんだ」ということを知りました。当時のわたしは「これぞテナーの醍醐味」などと言っていました。

Hコーラスは、自らを「コンサートクワイア」と名づけていました。日常は、毎朝ある礼拝で聖歌隊として奉仕をしました。昼休みは毎日、朝の礼拝のための讃美歌の練習をしていました。そして放課後は、年3回ホールを借り切っておこなうコンサートのための練習をしていました。

Hコーラスは、ほぼ完全に生徒による自主運営のクラブでした。指揮者はもちろん生徒です。伴奏者も生徒の中からピアノの得意な人に頼んでいました。顧問の先生はもちろんいました。それも単なる音楽の先生ではなく、日本屈指のオルガニストであり、宗教曲の専門家でした。しかし、日常の練習で顧問の先生のタクトで歌うことはほとんどありませんでした。

コンサートホールを押さえるのは自分たちの仕事です。お金の算段のために、パンフレットに広告を載せますが、この広告とりもみんなて手わけをしてやりました。また、夏には長野県で合宿をおこなっていました。宿舎の手配や往復のバスの手配も、すべて生徒がやりました。顧問の先生は、「付き添い」と、コンサートで歌う宗教曲の指揮をするだけでした。

しかし、すべてに責任をもつということは、同時に自由を手に入れるということでもありました。コンサート後は、部員の家泊まり込んで打ちあげをしました。合宿の夜は卒業生たちと遊んだり、門外不出の「秘密の儀式」をしました。今振り返ると、わたしの生徒観やクラブ観というのは、この時の経験に源流があるんだろうなと思います。ほんとうに充実したクラブ生活を送っていました。ただ、心の中に小さなトゲのようなものがあつたことも、今思い出します。

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

セクシュアリティの軌跡

本書は「アンアン」という隆盛を誇った女性誌の創刊から今日までをたねんにたどることによって、女性のセックスに対する意識について分析を試みた評論である。著者の北原みのは「アンアン」が創刊された1970年に生まれ、青春期に同誌のセックス特集に大きく影響を受けたフェミニスト。彼女によると、初期の「アンアン」は、きわめて前衛的で、女性解放への志向も色濃く、レズビアンさえも肯定的に取り上げていた。

80年代に入っても、政治色こそ後退するが、女性の欲望に肯定的で、性的にもより解放されていく。この頃に、北原は「アンアン」と出会うわけだが、彼女を開眼させたのが、有名なセックス特集「セックスで、きれいになる。」(89年)。北原に言わせると、これが新しかったのは、「欲望を丸出しにしているのに、きれい。そして全然男に媚びてない。……すべてが『女目線』だった…」。

たしかにこの特集のインパクトは大きかった。「アンアン」の読者でもない男性の筆者ですら、現在でもこのコピーを鮮明に憶えているくらいで、その世代の女性たちへの影響は推して知るべしだろう。北原は、「自分のために、私のためにセックスがある」というメッセージに打たれ、それまで抑圧していた自分の性に積極的になっていったという。

こうして女性が自分自身のセクシュアリティを自覚し、欲望に忠実になっていく時代の流れと、「アンアン」は手を携えて上り坂を駆け上っていく。が、バブルが弾け、90年代も半ばを過ぎると、様相が変わってくる。レディコミなど女性向けのエロ媒体の退潮が顕著になり、「アンアン」のセックス特集も、性解放より「愛あるセックスが何よりも一番! と喧伝しはじめる」。例えば、それは、「最高のセックスは、愛される幸福感をもたらす」といったコピーに象徴される。そして、興味深いのは、愛に執着する一方で、具体的なセックスのハウツーについての記事が増えて



アンアンのセックス できれいになれた?

北原みのり著
朝日新聞出版
1,365円(税込み)

いったということ。

この辺りから分析者としての北原のいらだちも顕著になっていく。セックスが愛に過度に結びつけられることや、相手を喜ばせるためのハウツーへのこだわりが、男に媚びていて、やっと獲得した性的主体としての自由を剥奪されるような不安を抱いたのかもしれない。セックスの自由と、女性の自立を重ね合わせて考えてきた感性には、それはたぶん「保守化」でしかない。

けれど、こうした傾向は別の解釈も可能だ。婚前交渉(もはや死語!)が当たり前になればなるほど、セックスは「解放」でも「自由」でもないただの「性行為」になり、回数やパートナーが増え、性技が多様化すれば、「幸福感」がもたらされるわけではないこともわかってくる。逆に、他者との無防備な接近戦だから、不本意な事件が生じたり、妊娠や性感染症などの問題も避けられない。そうなると、ある程度、愛もとい関係性への回帰も既定路線と言える。

さらに、性的主体の獲得よりも、他者からの承認を渴望している若者ならば、セックスを一次的な目的にするのではなく、むしろ手段にする指向も生じるかもしれない。そうした実存にとっては、愛の獲得のためにこそより積極的にセックスのスキルを磨かなければならない、という逆転が生じる。他人からの承認を得るためにセックスを活用する、というわけだ。しかしそれは、「対抗的」でないだけで、必ずしも「保守」や「媚」ではない。むしろ女性たちのきわめて「主体的」で「機能的」な「戦略」と読めなくもない……。

このように議論の余地はあっても、北原の考察が大いに刺激的なことは間違いない。それは著者が自分の半生を深く深いながら、雑誌という時代の痕跡を浮き上がらせているからだろう。その緊張感に、読者は彼女の経験値や感覚を、自分自身のそれに響かせざるを得ない。そうした著者との対話によって、この国のセクシュアリティの軌跡と、読み手自身の性愛の輪郭線は明瞭になっていくはずだ。

(作家・伏見憲明)

▶▶ 12月11日(日) 13:00~17:00 ◀◀

第12回関西性教育研修セミナー テーマ「支援学校における教育とケア」

内容 「福祉と教育の谷間～性的問題に対する視座への問い」 東優子 (大阪府立大学)
「性的問題行動への教育的アプローチ」 浅野恭子 (大阪府池田子ども家庭センター)
「知的障がいのある生徒への支援実践」 池川典子・船木雄太郎 (大阪府立泉北高等支援学校)・野坂祐子 (大阪教育大学)、ほか。

会場 K.G ハブスクエア 1005 (関西学院大学 大阪梅田キャンパス) (大阪市北区茶屋町 19-19 アプローチタワー 10階)

参加費・問い合わせ

参加費/1,000円(資料代)。定員/40名(先着順)。対象/子どもへの支援・教育に関わる方、テーマに関心のある方。
主催: 関西性教育研修セミナー実行委員会 協賛: 財団法人日本性教育協会
問合せ先/E-mail seekansai@inter7.jp URL http://seekansai.web.fc2.com/SEE

11/12(土)

10:00~17:45

11/13(日)

10:00~16:15

クィア学会 第4回研究大会

内容
1日目: シンポジウム
「3.11以後のクィア」
シンポジスト:
高橋準 (福島大学)

堤愛子 (町田ヒューマンネットワーク)
新田啓子 (立教大学)
真木柊鷹 (性と人権ネットワーク ESTO)
司会: 菊地夏野 (名古屋市立大学)
映画上映、ほか。
2日目: 個人研究報告、ほか。

会場 中央大学 多摩キャンパス
(東京都八王子市東中野 742-1)

【問い合わせ先等】

参加費/一般2,000円、会員1,000円、学生1,000円。問合せ先/クィア学会事務局
〒467-8501 名古屋市瑞穂区瑞穂町字山の畑1
名古屋市立大学人文社会学部 菊地夏野研究室
気付 TEL & FAX 052-872-5171
E-mail jaqs.info@gmail.com
URL http://www.queerjp.org

▶▶ 12月11日(日) 10:30~16:30 ◀◀

第24回女と健康フェスティバル

内容 【テーマ】「どうなってんの?! 日本のリプロダクティブ・ヘルス/ライツ」

内容 分科会: 「カウンセリングについて」「男女共同参画について」「思春期相談から」「本人抜きの子宮頸がんワクチンって?~性的自己決定権を取り戻せ!」ほか。基調講演: 講師・福島瑞穂 (参議院議員)、シンポジウム: 加藤治子 (産婦人科医)、ほか。

会場 とよなか男女共同参画推進センター すてっぷ

参加費・問い合わせ 参加費/一般2,500円(前売2,000円)、学生1,000円。
問合せ先/ウィメンズセンター大阪 TEL 06-6632-7011

12/26(日)

13:30~17:00

健やか親子21 公開講座

テーマ 思春期のこころとからだの健康~こどものからだ、こころ、そして性を守る~

内容 講座: 「こどもの自殺と『うつ』」 宇佐美政英 (独立行政法人国立国際医療研究センター国府台病院)、「おんなのこころと性」 齋藤益子 (東邦大学)、「おとこのこころと性」 高波真佐治 (東邦大学医療センター佐倉病院)、ほか。

会場 東京慈恵会医科大学大学1号館3階講堂 (東京都港区西新橋 3-25-8)

問い合わせ先等 参加費/無料。定員/250名(先着順)。締切/11月末日必着。
問合せ先/〒105-0001 東京都港区虎ノ門2-3-17 虎ノ門2丁目タワー6階 日本学校保健会内 健やか親子21第1課題公開講座係 TEL 03-3501-0968 (担当: 三谷)